

政治的に正しければ  
「愛国無罪」か

評論家・近代史研究者

辻田真佐憲

This article appeared in the May 2024 issue of 中央公論 and is used with the permission of the author and the consent of the publisher. Please translate the entire article, including the title and author information. The translation should be complete, accurate, and as natural as possible. Please maintain the paragraph structure that is used in the Japanese text.

東京・上野の国立西洋美術館（西美）で、現代美術の企画展「ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？」が3月12日から開催されている。

西美は、川崎造船所社長を務めた松方幸次郎が主に第一次大戦中に欧州で買い集めた美術品のコレクションを基礎として、1959年にオープンした。モネの「睡蓮」やロダンの「考える人」などの名作が数多く收藏されている。松方はこのような本物の西洋美術を日本に持ち帰り、若い画家たちに刺激を与えたいと考えていたという。では開館65年となる今日、現代美術のアーティスト

たちを見て、日本の美術レベルも向上させなければならなかったことだった。その原点を忘れてはいけない。

それに加えて、川崎造船所の後身にあたる川崎重工は現在、イスラエルよりドローンを輸入して防衛省に販売しようとしている。これは虐殺への加担である。西美は、同館のオフィシャルパートナーになっている同社に武器輸入を止めるよう働きかけるべきだ――。

昨今、美術館が政治的パフォーマンスの場となっており、展示が環境活動家などによって標的とされる事件も起きている。国際的な動きにもかなりということ、飯山らの行動にはSNS上で賛同する声が早々にあがった。

なるほど、彼女たちの問題意識はわかりやすい。企画展の趣旨に照らせば、松方コレクションの来歴に焦点を当てるのはもっともではある。虐殺に反対するというメッセージの内容に異論があるはずもない。

そのいっぽうで、このような突発的な抗議のやり方と抗議内容と密に連動する飯山の出展作品の是非については別に検討されなければならない。たとえば、ドローンの輸入をもって虐殺への加担とまで断じていいのか。抗議を際立たせるため、無理に物語をつくってはいないか。

トたちはそれにどう応答するのか。今回の企画展は、そのような考えのもとで企画された意欲的な試みである。

ところが本展は思わぬかたちで話題になった。3月11日のメディア向け内覧会で、出展作家の飯山由貴らが「パレスチナで現在起きているイスラエル政府のジェノサイド」に反対するなどとして抗議活動を行ったのだ。予定外のことだったため、警察が出動する騒ぎにもなった。

彼女たちの主張はこうだった。松方幸次郎は第一次大戦の軍需景気で得た資金で美術品を買い集めた。しかもそのきっかけは、英国で優れた愛国的プロパガンダポス

トにするにここで言いたいのは、「政治的な正しさ」だけが評価の尺度ではないということである。表現の巧拙、調査の徹底度、幅広い訴求性。尺度はほかにたくさんある。これは政治的な正しさを否定しているわけではない。ただ、政治的に正しいことをやっていれば拘り定規に肯定するというのは「愛国無罪」のようなものであって、表現の軽視になりかねないと言いたいのである。

ところが今回、このような意見は抗議活動に水を差すものとしてバッシングに晒された。世界の潮流を知らない、「アーティスト」的な振る舞いだというのだ。

本当にそうだろうか。政治はものごとを「賛成か反対か。賛成しなければ敵だ」と単純化しやすい。今回もその悪弊が出たのではないか。肝心の展示を見ずしてバッシングに加わる人間の多さがその証拠だった。

筆者は企画展を初日に見に行った。今のところ「あいちトリエンナーレ2019」のような炎上は起きていない。とはいえ今後、美術館で政治的な騒ぎが起こることもあるだろう。そのときに空気に流されないためにも、政治以外の尺度が不可欠である。企画展の会期は5月12日まで。ぜひ会場に足を運んでみずから考えてほしい。📌